

## 新刊 Book Reviews

□豊田武司：小笠原諸島固有植物ガイド 2014. A5. 623 pp. ウッズプレス. ¥3,500 + 税. ISBN 978-4-907029-03-6.

小笠原植物についての、著者の長年にわたる蓄積を整理したもので、今後しばらくは、これに肩を並べる作品は現れそうにない。1-176 頁の図鑑編では、125 種類の固有種、および 91 種類の非固有種、外来種がカラーで見られる。これに加えて父島、母島の代表的林相 8 点、小笠原諸島の代表的景観 20 点が示される。

本文はまず、固有種の解説に始まり、70 種類の木本、38 種類の草本、17 種類のシダについて、学名、和名の詳細な解説、植物体の記述、現場での生態や変遷について詳しい。とくに長期在島者と一時的訪問者による記録の落差については、丹念に比較検討している。

499-529 頁には、中井猛之進：小笠原島の植物（理学界 26(4), 26(5), 1928 年）が再録されているのだが、著作権利用についての断り書きが見当たらない。本書の刊行元である、ウッズプレス社の森社長に尋ねたところ「著者の中井氏は 1952 年に亡くなっており、作品の著作権保護期間の 50 年は過ぎてている。また理学界の発行所として記録されているいくつかの会社名は、今日、インターネット検索で現存が確認できない。」とのことだった。中井氏の作品は、小笠原の植物をまとめて扱った最初の文献で、植物リストと研究史、植物目録、木本植物の近隣地域を含む分布表に加えて、豊田氏の詳細なチェックが加えられており、単なる再録以上の付加価値が生じている。

559-590 頁の小笠原諸島の植物目録には、父島、兄島、弟島、母島、向島、火山列島（硫黄列島）における約 840 種類の植物が、その由来を固有、帰化、野化、栽培に区別して挙げてある。

まだ遠洋航海が冒険だった時代から、あるいは戦後の食料源として、島々に放たれた山羊による被害は甚大で、賀島列島などでは、植被が喰い尽くされた島もあるという。最近ではほとんどの島で山羊の駆除は終わったそうだが、父島本島ではまだ残っていて、彼らの好物のオオハマギキョウの集団が、突然食いつくされてしまったりすること。

無人の離島における植被の移り変わりは、海洋

島のフロラ変遷を知る一助となるだろうから、今後注意深く見守る必要がある。この点からすると、資料 III の植物目録には、賀島列島、鳥島、沖ノ鳥島、南鳥島なども、一緒に記録できるように、表を設計しておいてもらえたら、後続の人たちが利用し易いだろうと思った。硫黄島（中硫黄島）のような、激戦の後に基地として利用され続けている島では、他の島とは異なる変遷が記録されるだろう。こういうことは言うは易く行うは難い。というのは、得られるべき成果を予知することができず、しかも研究費がもらえる期間に対して、成果が期待されるまでの時間が、桁違いに永いからである。「いつまでも空き地にしておかないで、ゴルフ場にしたらどうか」とか「一部に保護緑地を作って、残りは空港にする方が、費用対効果の面で有効だ」という短期決戦型の主張に、自然史研究は対抗し難い。アホウドリ営巣地の移転に成功したのはご同慶の極みであるが、「折角だから、観察台を造って皆に見てもらおう」ということになりはしないかと、心配している。

（金井弘夫 H. KANAI）

□浅井元朗：植調雑草大鑑 B4. 359 pp. 2015. 全国農村教育協会. ¥9,800 + 税. ISBN 978-4-88137-182-4.

表題の「植調」とは、本書を企画した日本植物調節剤研究協会のこと。

15 頁の「本書の利用にあたって」によると、2010 年代の日本において、人間の管理（人為攪乱）が加わる立地に生育する植物群のうち、水田雑草 129 種と、畑地雑草 583 種、計 712 種を採録し、うち約 500 種について、種子、幼植物、成植物、花、果実の写真を掲載した、とのこと。

原則として、見開き 2 頁に 2 種類（ときに 4 種類）を配し、出芽直後の子葉の展開期から、以後数節にわたる葉の展開状態が必ず示されている。これは、早期に種類を判別して、有害種ならばその対策を講じるのに役立てようという配慮と思う。

開花、結実期の草丈は、足首、膝、胸... のように、大人の身体部位で示され、正確さを強調した a-b cm よりも実感的だと思う。花や果実のアップ、種子（この用語については後述）の写真はもちろんついている。

たとえばオオイヌノフグリの見出しの下には、次のような項目と記述がある。「大犬の陰囊. speedwell, Persian. オオバコ科. クワガタソウ属.

西アジア. 分布: 全国. 出芽: 9-6月. 花期: 2-6月. 草丈: ~膝. 生活史: 一年生 (冬生). 繁殖器官: 種子 (400 mg). 種子散布: 重力, 付着. これらの項目や記述法はすべての種類に共通で, 今後ほかの植物図鑑でも取り込んでもらいたい形質や様式なのだが, 用語の使い方に考え直してもらいたいものがある.

たとえば「繁殖器官: 種子 (400 mg)」とは, 「繁殖器官は種子で, その 1000 粒の重量が 400 mg」であることを意味する, 雑草学用語である. しかし植物学一般では, 「種子」という用語は, 農学でも雑草学でも, 「胚珠が成熟したもの」と定義されるのが常識である. 本書で言う「繁殖器官」は, いろいろな起源のものを含む「散布体」と呼ぶべきもので, 「種子 400 mg」の「種子」は, ナズナやクズならば種子でよいけれど, タンポポやヘビイチゴなら瘦果, オナモミならば果序あるいは総苞と呼ばれるものである. だから本書の「繁殖器官: 種子 (400 g)」の「繁殖器官」は, 「散布体」と表現するのがよく, 「種子 400 mg」は前記のように, その種類によって異なる表現にするのがよい. 「そんななじみの無い用語は使えないし, 前例も無い」というのなら, 「タネ」という用語を当てたらどうだろうか.

こういうことは学術用語集選定の際に, 分野間の比較調整を行えばよいのだが, 選定作業の途中では, 植物学の内部での調整でも精一杯なのに,

選定委員会もできていない, あるいは既に選定を終わって公表している他分野と調整することなど, できない相談である. 先年の植物学用語集改訂の際も, 委員の強い要望によって, 先行した他分野の用語の使い方を「正して」もらおうと試みたが, 「国語審議会にかけてまで決定した用語の用法を, 後から変更していたらキリがない」と, 実現せず, 一部の委員からはキツイお叱りをいただいた. 当時は文部省 OB に, 多分野に関わる用語選定に詳しい人がいて, いろいろ助言・調整をしてもらえたが, 今日ではそういう人もいなくなってしまった.

もう一つの註文は, 実生や散布体の写真に, スケールをつけてほしいことだ. 実生の写真図や写真に, 倍率表示ではなく, スケールバーを付けることは, 従来からその都度お願いしているので, 同じ趣旨であり, 種子や散布体についても同様である. 種子や瘦果については, 方眼紙をバックにした映像がふえてきており, その行き方が定着するのでは ... と期待している. 草の成体の大きさについては, 「高さ〇〇~△△ cm」と正確ぶるより, 本書のような体のサイズと比べるやり方が, 普及すればよいと思う. 体の大きさを超える様な場合には, 「〇〇~△△ m」でよからう. 雑草ばかりでなく, 植物図鑑というものの共通なスタイルが固まれば, データベース検索にも有用だろう.

(金井弘夫 H. KANAI)